6 大勢の人と自分とをつなぐ児童会活動
～企画委員会がリードして行うユニセフ募金活動を通して～

報告者　熊本県熊本市立慶徳小学校　田川 慎一先生

ポイント

本校は熊本市中心部にある児童総数144人の小規模校である。

児童会活動は、人の役に立つために自分の役割や自分にできることを考えて話し合い、みんなで力を合わせて活動を充実させることにより、協力、役割・責任、勤労・奉仕、社会参画などの道徳性を養う絶好の機会である。教師から与えられた仕事を行うのではなく、自分たちの創意工夫によって学校や社会に貢献できるようにするためには、どのようなヒントやアドバイスを与えるといいか。道徳的実践へのアプローチとして、以下の道徳の指導内容を意識しながら取り組んだ。

高2-(2) 誰に対しても思いやりの心をもち、相手の立場に立って親切にする。
高4-(3) 身近な集団に進んで参加し、自分の役割を自覚し、協力して主体的に責任を果たす。

実　践

(1) 計画

定例の委員会の時間に、今年のユニセフ募金活動をどのように進めるかについて企画委員会で話し合いを行った。その際「世界の子どもたちがみんな健康で安全に過ごせること。そして『学びたい』という願いが叶えられること。」という募金の目的を、活動のヒントとして伝えた。

昨年度は、企画委員会で作成した「しおり」を募金してくださった人にプレゼントした。**(図1)** 学校のシンボルマーク入りの手作り感が好評で、募金集計額が一昨年度より倍増した経緯がある。自分のよさを発揮し、自分たちの創意工夫でよりよい募金活動ができるよう、次のようなアドバイスをした。

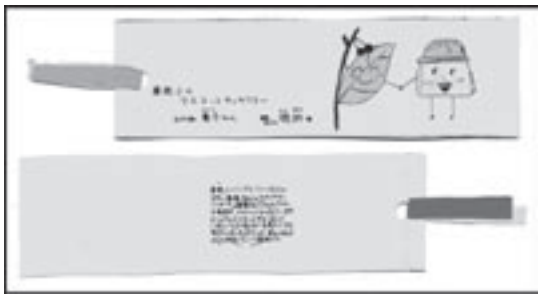

図1 「シンボルマーク入りのしおり」

どうすればもっと貢献できるか、知恵を しぼって自分たちにできることを決めよう。

話し合いでは、これまでの「ユニセフ募金呼びかけ」「街頭募金」に加え、「学校紹介新聞」を作成して募金のお礼として渡すことに決まった。さっそく、スケジュール表を活用し活動全体の見通しを立て、活動をスタートした。

(2) 募金活動の実際

新聞づくりから募金活動の期間まで入れると、約1カ月の長丁場になる。意識を高めたまま継続的に取り組めるよう、次のようなアドバイスをした。

図2 「児童会で作成した学校紹介新聞」

世界の子どもたちの喜ぶ顔を想像しながら、最後まで活動を続けよう。

「学校紹介新聞」は、自分の考える慶徳小のよいところを記事にしたり、校長先生へのインタビューや全校児童へのアンケートを集計した結果を記事にしたりした。**(図2)**

協力を呼びかけるプリントを準備し、朝の児童集会（ショート）で、学校で募金する趣旨や目的、募金期間を伝える発表を行った。

企画委員会の子どもたちは、募金期間中いつもより30分早めに登校し、自分たちで作った募金箱を手に持って、朝からしっかり声を出して募金活動を続けることができた。**(図3)**

図3 「朝早くから募金を呼び掛ける子どもたち」

街頭に立って地域への協力も呼びかけた。募金をしてくださった方にお礼の気持ちを込めて、作成した「学校紹介新聞」を手渡した。

目標額であった前年度の合計額を、募金活動の1日目で超えた。２週間の募金活動を終えた後、日本ユニセフ協会へ送金した。

(3) 振り返り

計画から実際の募金活動までを振り返る時間を設け、よかった点や見直すべき点について話し合い、次年度の活動へとつないでいけるようにした。ユニセフから感謝状や領収証とともに贈られてくるポスターの換算表で、275個の学習セット（スケッチブックと8色入クレヨン）を購入する分の貢献ができたことを知った。**(図4)** 自分たちなりに「世界の子どもたちの『学びたい』という願いを叶える」という目的を果たせたことを実感し、達成感や自己有用感を味わうことができた。

図4 「ポスターの活用」

学校生活の向上という視点で、企画委員会の子どもたちのがんばりを次のように称えた。

上級生のがんばりを見て、慶徳小のみんなが人の役に立つことを進んで行うようになったよ。

ユニセフ募金活動の振り返りをもとに、活動報告とお礼の言葉を掲載した児童会だよりを発行し、全クラスに配布して今年の活動を終えた。

成果と課題

○教師が柔軟性をもって適切なアドバイスを行うことで、子どもは自分らしさを積極的に発揮し、自分の創意工夫によって学校や社会のために貢献しようとする意識を高めて活動に取り組んだ。

○教師が道徳の内容を意識して子どもの活動を支援することで、協力、役割・責任、勤労・奉仕、社会参画などの道徳性を養う活動となった。

▲今後は、子どもが活動で得た達成感や自己有用感を上級生から下級生へ伝え広げることで、子ども自らが積極的にユニセフ募金活動に取り掛かろうとする「自発的」な態度まで高めていきたい。